




シャンダイア物語

～打ち捨てられた都～

福田 弘生

Anima Soraris



第四章

黄旗ひるがえる

ベリック達がロググに着いてからすでに三週間が経った。当初ベリックはすぐにもマサズの襲撃があるので、無いかと覚悟していたが、状況が変わった。元の西の将マコーキンが旧月光の将の要塞に入ったという情報が伝わったのである。マコーキンがリナレヌナに入ったという知らせはすでに届いていたが、それからほとんど間を置かないで報告が届いた程マコーキン軍の移動速度は速かった。

バルトールの旧都ロググは騒然とした、旧月光の将の要塞から東にはロググ以外に主立った要所が無かったからだ。軟禁されている宿の窓からベリックが外を見ると、柔らかい布のたっぷりとした衣装に幅広の帯をしめた黒髪の人々が荷物を持って右往左往している。いったい、何処に行こうと言うのだろう。ベリックはこれ程たくさんのバルトール人を、これまでに見た事が無かった事に気が付いた。

今のところベリック達はマサズがどうするのか様子を見守っている。ベリックがここを訪れた日以来、マサズはベリック達の前に姿を現わしていない。少年がその日の朝の寝床の寒さを思い出して外をよく観察してみると、吹く風には枯れ葉さえもまばらになっていた。

王を守る者達は、その日もいつものように一番大きなベリックの部屋に集まった。マコーキンに関する情報を

聞いた後では、さすがのフスツも神経質そうだった。部屋に入って落ち着かなげにイライラと歩き回ると、ソファで本を顔に乗せて昼寝をしているマルヴェスターに話しかけた。

「西の将がなぜやって来るのでしょうか」

あくびをかみ殺したマルヴェスターが、本を持ち上げて片目をあけた。

「もう西の将では無いよ。だがむしろそのほうがやっかいだな、あの男が何処にでも行けるようになったんだから」

床の絨毯の上に座り込んでいるサシ・カシユウは、飽きずに豎琴を弾いている。

「グラン・エルバ・ソントールのどの貴族でも無く、マコーキンと言うのがソントールの作戦の意図を解く鍵になりそうですね。彼を起用するにはそれだけの理由があるはずです」

マルヴェスターは本を頭の下に置いて横を向いた。

「そう、よりによってなぜマコーキンなのかと言う事だな。正直に言えばわしも困っとる」

サシはフツと笑った。

「老師が困るようでしたら、私達には方策がありません。本当にここがマコーキンの目的地だと思いますか」

「わからん。だがここより他にこのあたりには何も無い。

まさか長駆してセントーンの北に回り込むつもりでもあるまい」

「あるいはランスタイン大山脈を越えて、セントーンの裏を突きますか」

マルヴェスターは違うと手を振った。

「単独では無理だ。しかしセントーンを包囲している東の将がマコーキンと共闘に出る可能性は低い。たとえば元帥のハルバルトが命令したとしても、キルティアは自分の戦場をほんの一部でも他人に明け渡す気は無いはずだ。唯一の救いは皮肉な事だがログに兵力が皆無な事かもしれないな。ここで戦闘が起きるような事は無いだろう」

フスは立ち止まって腕組みした。

「しかしマコーキンがここを統治下に置いたら、我々は全く身動きが出来なくなります。王、我々はバリオラ神を探すべきではないでしょうか、女神が復活すればマサズとの決着はおのずと付くはずです」

窓から外を眺めていたベリックは物憂げな表情で振り向いた。

「ここを捨てるわけにはいかないよ」

ベリックは歩いて来て、部屋の中央の椅子に座った。

「でも女神をいつまでも苦しませてはおけない」

部屋の隅でこれも床に座っていたバリオラ神の神官のナバーロが、苦行僧のような表情で顔を上げた。

「私も女神を探しに行く事に賛成です。帰還した正統の王とバザの短剣があれば探し出す事が出来るでしょう。もうランスタインには雪が降り始めている頃です。これ以上ここにいると山に入る事すら出来なくなりませす」

ベリックはナバーロに顔を向けた。

「この前の冬にはサルパートの山脈に登ったよ」
フスツが首を振った。

「サルパートの時にはジンネマンの大洞窟という目的地がわかっていました。土地に詳しいマスター・モントもいた。しかし今度は行方不明のバリオラ神を探さなければならぬのです」

ソファアの上のマルヴェスターがクスリと思い出し笑いをしたのにサシが気付いた。

「どうしました、老師」

「ベリックを救い出す前に、西の将の要塞にある居留地に三日ほど足止めされた事がある。その時にはセルダンとブライスは三日でも待ちきれないといった様子だったよ。それに比べてベリックは落ち着いている」

ベリックがたずねた。

「二人はの間どうしていましたか」

「もちろん寝とった」

「待ちきれなかったのですか」

「そうだ」

ベリックは唇に指をあてて考え込んだ。

「ふーん。僕も昼寝をしたほうが良いでしょうか」

「他にいい考えがあるかね」

「いえ、今のところマコーキンの目的もマサズがどうするのかもわかりませんから」

「ならば寝たほうがいい。セルダンとブライスは居留地で三日眠った後、黒い盾の魔法使いゾノボートと戦ってこれを倒した。その後には黒い短剣の魔法使いギルゾンも倒した。彼らは常に神経を張りつめているわけでは無
いんだよ、必要とされる時に必要な力が出せばいいんだ」

ベリックは困った顔をした。

「どうした」

「僕が一番真似できない人物がいるとすれば、セルダン王子だと思います。不思議なんだけど、時々何も考えないで回りのものを受け止めているだけのように見えるんです。ブライス王子のする事はまだ何となくわかるような気がする」

マルヴェスターは少し驚いたようだった。

「よく気が付いたな。六人の守護者にはそれぞれ役割があるが、基本的には聖宝の力を引きだしてソントールの力に対抗する事だ。聖宝は守護者が積極的に働きかけなければ力を発揮しない。だが実は二人だけ、極めて受動

的な守護者がいる。意外なようだが、セルダンがその一人だ。まわりの物事を素直に取り込んで行って爆発的な力に変える。セルダンの父親のオルドンは闘争心が強過ぎてセルダンのようにまわりの力を受け入れる事が出来なかった。見かけはひ弱いが、セルダンは歴代で最強の剣の守護者になる可能性がある」

「もう一人の受動的な守護者は誰ですか」

「盾の守護者のエルネイアだが、こちらは少し説明が難しい。セントーンに行った時に教えよう」

「そうですね、それでは僕は寝る事にしましょう」

ベリックが続き部屋のベッドに向かうと、フスツの四人の部下のビンネ、クラウロ、バヤン、トリロが後に続いた。それを見送ってからマルヴェスターはナバーロを振り向いた。

「ロッグ陥落以来、短剣の守護者はいなかったわけだが、かつての守護者達はあるに落ち着いていただろうか」

ナバーロは首を振った。

「いや、バルトール人の特性は激情家である事。おそらくベリック王の心はここを抜け出したい激しい衝動にかけられている事でしょう」

その時、ドアにノックの音がしてマサズの息子のピスタンが部屋に入って来た。バルトール人には珍しい長身

のピスタンは部屋の中をぐるりと見回して、ナバーロに目をとめた。

「見慣れん奴がいると聞いたが、女神様の神官服を着ているではないか。貴様は誰だ」

ナバーロは立ち上がって深々と礼をして答えた。

「ソントールの目を逃れた山奥の教会の司祭です。ベリック王のご帰還の噂を聞きつけて山を降りて参りました」

「なる程、それはご苦勞な事だ。ところでそのベリックはどこだ」

部屋の中央にいたフスツがピスタンをジロリと睨んだ。

「俺は場合によっては、この都で四人の男を殺すつもりでいる。マサズ、イサシ、そして貴様とトンイ。最初に死ぬのは貴様か」

ピスタンは真っ青になってモゴモゴつぶやいていたが、やがて小さな声で言った。

「ベリック王はどちらに」

「寝室でお休みになっている。用件は何だ」

「マサズ様がバリオラ神の声をお伝えになる。明日の正午に呼びに来るのでベリック王に出席の用意をしておいていただきたいと伝えてくれ」

「わかった」

不安そうなピスタンが出ていくと、マルヴェスターが

ナバーロにたずねた。

「どうやってバリオラ神の声をマサズに伝えていたんだ」

ナバーロはまた腰を下ろした。

「マサズがモツホの粉で興奮状態になるとある種の神気が通る道が出来るんだ。わしはマサズの道を受け取る、するとバランスを取るように反対側に女神への道が繋がる。それが女神が私に授けて下さった力だよ」

マルヴェスターが起きあがって膝に肘を付いた。

「おぬしの意志でマサズからの道を女神に通じさせないようにする事が出来るかね」

ナバーロは顔の前で手を振った。

「いやいや神の力の配分だ、とてもわしには出来ん。道は自然に繋がってしまう」

「そうか、何か方法はあるだろうか」

「さあて、マサズから道を受け取った後、少し女神を探しているような感覚があるんだ。その時に女神の替わりにつり合うような者を、そこに置く事でも出来ればいいのかもしいないが」

「わしがバリオラ神のふりを出来るだろうか」

「どのくらい似せられるのかわからないが、簡単にはごまかせないだろう。マサズはモツホの粉でおかしくなっているが、それでも旧都ロググのバルツールマスターで

ある事に変わりはない。このマスターは常に有能だったはずだよ」

「そうか」

ナバーロがハタと気が付いた。

「マルヴェエスターよ、そなたロググ陥落の時にはここにおったのだよな」

「ああ」

「ガザヴォックとバリオラ神が会った場所がわかるか、女神が最後にいた場所に何か女神の手がかりがあるかもしれない」

マルヴェエスターが難しそうな顔をした。

「場所はわかると思うが、ここまで都の様子が変わってしまったては」

サシ・カシユウが立ち上がった。

「行ってみたいですね、女神が最後にいた場所に。どのあたりですか」

「ロググの南の外れの聖堂だ、今では瓦礫すらも残っていないと思うが」

フスツが手を叩いた。

「いえ、瓦礫は残っています。なぜかソントール軍は占領後その場所には手をつけませんでした」

「ふうむ、ガザヴォックが何か魔法の跡でも残しているのかもしれないな。行ってみるか。フスツ、明日の早朝

に聖堂跡の掃除をさせて欲しいとピスタンに伝えてくれ」

「その必要があるでしょうか、ここにいるのは精鋭です。この程度の警備など抜け出すのはたやすいですよ」

「いや、王の行う事だ。堂々としようではないか」
フスツはハツとした。

「これは私とした事が」

サシがフスツに近づいて肩に手を置いた。

「あなたは一国の王の側近になるのです。少しずつでもいいですから、ベリック王に王道を歩ませましょう」

フスツはなぜか寂しそうな顔をした。

「俺程、その任に向かない人間はいない」

しばらく考え込んでいたナバーロが口を挟んだ。

「しかしなぜマサズは女神の声を聞くのだろう。ロツグの志気を高めるためなのかもしれないが、女神の悲鳴しか伝えられないはずなのに」

サシがマルヴェスターに言った。

「なる程、演技でもして別の事を言うつもりかもしれませんが。これは聖堂跡の調査は必要無いかもしれませんがね」

「いや、それはしておこう。女神を探し出す手がかりがあるかもしれない」

その夜、ベリックは妙にさっぱりした顔で夕食の席に

顔を見せ、おいしそうに食事を平らげた。

夜のうちにフスは使いをピスタンの元にやり、マサズの息子は特に疑問も持たずに聖堂跡の掃除を許した。今は迫り来るマコーキンの事で頭がいっぱいなのかもしれない。

翌朝、バルトール宿らしい曲がり角の多い廊下を通じて外に出た一行は、宿の外の人だかりに驚いた。皆が宿の屋根を見上げている。つられてふと屋根を見上げたマルヴェスターは仰天した。黄色い旗がひるがえっていたのだ。一緒に見上げたサシ・カシユウがつぶやいた。

「バルトール王旗」

隣でベリックが嬉しそうな顔をした。

「ビンネ達に頼んだんです」

マルヴェスターはベリックを睨んだ。

「これは何のつもりだ」

「ここまでの旅を振り返って考えた末の僕の意志です。もしマコーキンがここに来るのならば、僕は討って出たいと思います」

「何だと」

ベリックは真剣だった。

「マコーキンと戦うんです。ログは無抵抗で敵に渡してはいけません。世界中のバルトール人のためにも、帰還

した王は抵抗をしなければならぬ。でないと、バルトールという国は今度こそ本当に無くなってしまう」

「兵はどうする」

「たとえ僕一人でもいい。バザの短剣の魔法は弱き心を励ますためのものですから、ログの民衆の心を支えるためには僕が立つしかないでしょう。そういう意志の表現なんです」

「これではつきりと、マサズを敵にまわしたのかもしれないぞ」

「それでもかまいません」

シャンダイアの相談役である老魔術師は、顔を手で抱えて天を仰いだ。

「おお、やはりおまえはバルトール人の子だった。何て無謀な事をするんだ」

ベリックはニコニコしながら何の模様も無い黄色い旗を見上げていた。

(第五章に続く)

著者紹介

福田 弘生 (Fukuda Hiroo)

<http://www.sf-fantasy.com/magazine/novelist/h-fukuda.html>

作品紹介

http://www.sf-fantasy.com/magazine/novel_1/chandaia/index.shtml

打ち捨てられた都 うす みやこ —シャンダイア物語—

2002年9月8日 第1版第1刷発行

著者 福田 弘生 (Hiroo hukuda)

発行人 中条 卓

発行所 アニマ・ソラリス

URL <http://www.sf-fantasy.com/magazine/>

制作 松谷 和加子 (電脳工房りっくらく)

表紙 三上 央子 (電脳工房りっくらく)

本書の文章及び図面、イラストに関しては一切の無断転載を禁止させていただきます。
希望される場合はメール (master@sf-fantasy.com) にてご相談ください。